

Title	コンピュータ・グラフィックスにおける色彩と抽象表現の研究
Author(s)	赤阪, 季与子
Citation	デザイン理論. 2006, 48, p. 102-103
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/53192">https://doi.org/10.18910/53192</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## コンピュータ・グラフィックスにおける色彩と抽象表現の研究

赤阪季与子／大阪芸術大学大学院芸術研究科芸術専攻博士後期課程

私の制作研究課題は、コンピュータ・グラフィックスによって演出する色彩と抽象表現の探究である。

私は今日までコンピュータを活用して、色彩と幾何学図形における抽象表現のコンピュータ・グラフィックス作品の制作に取り組んできた。これからは、これまで習得してきた制作技術を十二分に発揮し、そして経験をさらに伸ばして、コンピュータを操作することによって、色彩と抽象表現の研究を深めることである。

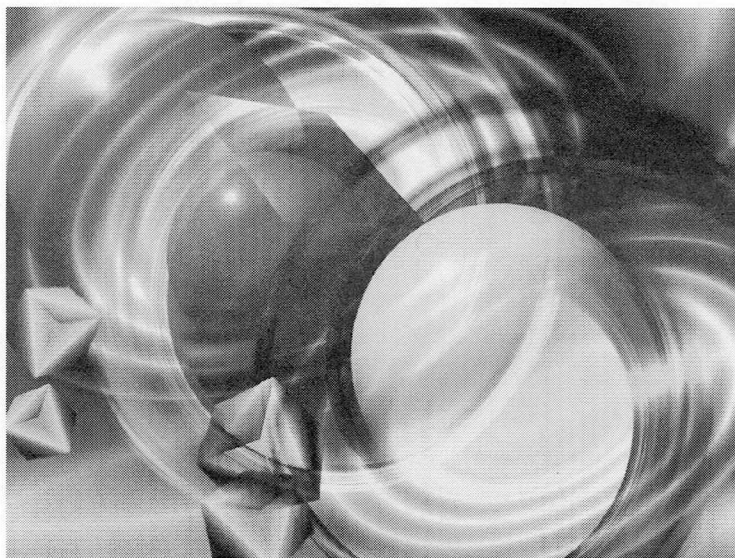
色はその時のコンディションに左右されることもあるが、私の場合、常に使いたい色の組み合わせや、こんな色がこんなに美しく見えるのはどうしてなのかを日常の中でいつも観察している。例えば、ビルの窓に映える真っ赤な夕日の色。紺碧の海、青く澄んだ空を背景とした白く輝く家並みの鮮やかな色調の配列。レストランのテーブルクロス、その上にあるワインのラベルの色との関係。ベタ色に印刷された雑誌の切り抜き、さまざまなパッケージの切れ端、など……。現在、コンピュータは何千万色を表現できる状況であるが、大切なのはそのテーマに対する自分自身の個性のある表現として、適している色調かどうかということである。

色には色相、明度、彩度といった属性があるが、言葉の理解の範疇ではなく感覚的なものである。従って、経験や体験を受容する力を養うことが最も必要となるのである。感覚はすぐにサビてしまいがちである。そのために常に何かに感動していることが大切であり、さらに、最も重要なことは、感性を研き上げ

ることである。

色は単色でも力強い表現が可能であるが、またいくつかの濃い色——濃い赤、濃い紺、濃い緑で画面いっぱいに埋め尽くしたり、その中に異なった系統の色を演出させて、温かい空気で満たしたり、時には淡い色の一群が結集して暖色の背後にひと続きの壮大な空間を広げようとする。また、色を束ね、組み、つなげることで前後の動きが現れ、ありとあらゆる自由が混在し、けんらんたる装飾効果が生まれる。明るさ、はつらつさ、壮快、ぬくもりと私たちの目の前に映る新しい無限の表情を色彩と抽象表現によって総合的に演出する構成力を向上させようとするものである。

またさらに、抽象表現にとどまらず、絵というものが二次元の表現だからこそ可能となる空間、時間、距離を凝縮させた平面における三次元世界の表現方法として取り入れるなど、多様な角度から具象的で動的なモチーフ、例えば、「蝶」や「草花」……などを用いて、より一層の美しさを保ちながら、エネルギーに動いているうねりや運動の躍動感、やさしさ、暖かさ、繊細さ、そして柔らかさ、などを見る者に強い感動を与える視覚効果の高い新しい表現手法を編み出し、新たな表現領域を広め、緻密さを深め、そしてしなやかな発想および感性、思考、イマジネーションを豊かにし、造形力を向上させ、さらにそれを魅力的で価値のあるクオリティーの高いコンピュータ・グラフィックス作品の映像として演出することを目指すものである。



#### 作品1.「競演」

光とともに誕生した大きな赤い球と青い球は、力強く、時には優雅に生命力に溢れ、空間を駆けめぐり、消えていき、そしてまた現れる。

今まさに、画面からつぎつぎと溢れ出ようとするエネルギーに満ちた生命力を描いた。

728×1030mm

#### 作品2.「疾風<sup>かぜ</sup>」

まばゆいばかりの光の渦は、広い空間の中で無限に発せられるパワー、生命力を表現している。それはまた光の強弱、色の濃淡や色調の変化によって緊張感と温かみが織りなす世界を創り上げた。

1030×728mm



機種—Power Mac G4／ソフト名—Adobe Photoshop 6.0／解像度—120dpi／出力—EPSON PX-9000で制作。